活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第7号/平成14年12月15日発行　青森県立保健大学広報誌

第4回青森県立保健大学祭・テーマ「HAND MADE」

CONTENTS

オーストラリア海外授業…… 2
日韓学生交換交流事業…… 5
青森県・ロシアハバロフスク地方青年交流事業
…… 8
自治会長を務めて…… 9
第４回青森県立保健大学祭……10
サークル活動紹介……12
パメラ先生印象記……13
実習記録……14
ニュース(公開講座開催実績、教職員親交会、献血運動に対する感謝状贈呈、C棟紹介、研究談話会)
……16
就職活動進捗状況報告……19
大学院について……20
出版物紹介……21
学会等印象記……22
編入学生募集／人事異動……24

[今年は色々ありました]

人間総合科学科目教授(科目責任者/引率教員)
Noel Fukushima

人間総合科学科目の English Communication は今年も年明けと同時に準備スタート。 留学先であるモナシュ大学への、新道学長の表敬訪豪も決まり、後は出発を待つだけとなった矢先、予期せぬ出来事の (1) が起こった。以下、色々あったハプニングのいくつかを順を追って略記する。

(1) 出発1週間前、大韓航空の Over Bookingで座席が取れていないことが判明 (JTB報告)。急遽カンタス航空便に変更。JRを乗り継いでの成田行きとなる。
(2) 出発の前日、参加予定学生のひとりが「体調不全」を理由に参加を取りやめる。
(3) ホストマザーが学生を車で大学まで送ってくる途中で交通事故に遭遇。学生は首と腕などに痛みを訴えたが、帰国までに快癒。
(4) 参加学生達に旅費の一部、一人宛 ￥41,315 (良い最後) の払い戻しがあった。

人間総合科学科目講師 Dennis Kelly

It does not matter how many times you reassure the students that all will be well before they leave they will always suffer from nerves. This was especially true on the first day of their stay in Australia when they met their host families for the first time. It was probably only towards the end of the first week that the students began to relax and get the most out of their homestay experience. By the end of the third week the students had established a bond with their host-families and teachers, and were comfortable enough with their surroundings to wish that they were able to stay longer. Many a tear was shed in the graduation ceremony.

The success of the program is in no small part due to all the work AACE and Prof. Fukushima were putting in behind the scenes both before and during the homestay. They not only ensured the travel arrangements (despite the unforeseen), and the program itself went smoothly but also that the students were placed with a family that would be most suited to them.

As an 'English Communication' program, realistically, there is only a limited amount of linguistically orientated learning (the 'how' to say something) that can come about within a three-week period; The real value of this experience for students was firstly in the pragmatic English learning (the 'when' and 'what' to say according to the situation), and secondly in the intercultural experiences, for example, learning about how people think and do things in another culture, which of course comes out paragraph in the language. They learn in 'read' situations. I am sure all the students will agree that this experience not only brought the language to life but also helped to open their eyes as to what is actually required in successful English communication and the adaptations that are necessary mentally. Most students recognise that this experience was just the beginning of their English communication study and look forward to further experiences, experiences that will not only enrich their own lives but also their professional fields in the future.

ホストファミリーと御対面

看護学科助手 木村　恵美子

オーストラリアと日本は時差が１時間程度のため、身体が楽！とよく言われるが、学生にとって知らぬ土地での通学、買い物、慣れない食事、英語が通じないというストレスでやはり身体への影響は明らかだった。毎日何人かがそれぞれの不調を訴えた。一番多い症状は風邪と便秘であった。しかし学生は具合の悪さを抱えながらも通学し、毎日の宿題もこなしていく。テレビの内容に家族は大笑いだが、一人だけ笑えない状況に落ち込んだりしながら生活が過ぎていく。そんな中、初めての観光「グレートオーシャンロード＆ソルベリンヒルツアー」が１週目にあった。朝7：30に出発し、気温４度という寒い中で、やけに陽気な運転手は、室内の窓ガラスが「曇るから」という理由で100km出しながら窓を開ける。しかも本人は半袖であった。皆の笑い顔は、寒さに震え上がったせいでこわばりに変わった。どこまでも続くのどかな牧場風景と、気温上昇に伴い、やっと顔の筋肉が緩み、

話し声が聞こえるようになった。しかしバスから降りていざ見学となると、また私たちは緊張する。“○●？△◆◎”と運転手が言うのである。“えっ？何時にどこに集合？”ノーマルスピードでにっこり話されても学生と私の頭上には？マークが乱舞した。置いて行かれては一大事である。必死に聞こうとする。雨まじりの昼時、用意されたのは野外で食べるコールドチキン、よく冷えたジュース、果物、唯一温かいポテトフライだった。“寒さにふるえる観光も皆といれば暖かい”と声かけあって食べた。世界に名だたる12人の使徒と称される「The Twelve Apostles」には一同感動し、数億年もかかって岩が削れて行く様を目のあたりにした。はるか彼方の南極に思いを巡らせ、砂浜で童心にかえり波とりごっこならぬ、靴を波に取られてしまう学生もいた。中世の町並みを残すソルベリンヒルでの自由行動では砂金取りに没頭し、昔ながらの大きなミートパイを頬張りながら、ぶらぶらした。授業ではなく、今コーヒー１杯がほしいから、それを伝える手段として、学生は自然に英語を話し、相手の言葉に耳を凝らしておつりをもらっている。徐々に英語を使うことに、自信がついた学生達の成長ぶりを間じかに見て、とても頼もしく感じられた。ソルベリンヒルでは、中世時代のドレスに着替えての記念写真も撮った。セピア色に現像されて届いた写真には、満面の笑みやおすまし顔、妙に緊張した学生の顔があり、とてもかわいらしかった。一生懸命だった学生達と毎日共に過ごした３週間は、私にとっても記念写真に劣らぬ思い出である。

十二使徒
海岸で

日豪親善の一翼も担ってます

オーストラリアで得たこと

看護学科２年 佐藤　紗綾香

国際交流に興味を持っていた私にとって、三週間のホームステイ海外研修はとても魅力的なカリキュラムの一つでした。この海外研修に参加することは、高校時代に志望校を保健大学と決意した時から私の夢だったのです。それが実現した今、本当の家族のように私を受け入れてくれたホストファミリー、担任の先生との楽しい思い出が鮮明によみがえります。語学研修が目的とあって英会話の授業内容は充実していました。多大なる喜びと学びを得られたことに対し、高校時代からの夢を実現するために協力してくれたホストファミリーを始めとする周囲の人々に心から感謝しています。

ホームステイは、文化も生活習慣も異なる人と一緒に生活することで、普段の日常生活と異なった環境で様々なことを吸収できる良い機会でした。少しずつでもコミュニケーションをとろう、気持ちを表現しようとすることがホームステイを成功させるために欠かせないことだと実感しました。言語はコミュニケーションの一手段で大切なことは「伝えようとする気持ち」だと、ホームステイを振り返って思います。そして、気持ちだけでは補えない意思の疎通を図るために英会話の勉強もまた大切なのだと感じました。

この海外研修は、将来看護師になるために学んでいる私にとても大きなものをもたらしてくれました。その最も大きな出来事は、ナーシングレクチャーで解剖された臓器を実際に触れて勉強できたことです。やはり多少は恐怖心もありましたが、こうして将来医療の道へ進む学生たちのために勉強して欲しいと自分の体を提供してくれる人がいるのだと感じ、その人達への感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。自分が進もうとしている道の責任・その仕事の役割を改めて考え、今まで壁にぶつかると弱音をはいていた自分が恥ずかしくなりました。このオーストラリアでの経験を糧に、これから自分の夢へ迷いなく前進できるよう努めたいです。

シドニーの高層ビル

コミュニケーションで四苦八苦!?

理学療法学科２年 竹岡　亨

僕は英語があまり得意ではない。僕がホームステイした家には三人の小さい子供がいた。彼らは相手が日本人だろうが親だろうが同じように、速くてわかりにくい英語を話した。しかし、不思議なことにそんな子供たちとはすぐに打ち解けることができた。彼らは自分たちの家に来た変なやつに興味津々だった。三人とも表情がとても豊かで、言っている事が全く聞き取れなくてもお互いが意思疎通するのにそう時間はかからなかった。家には僕のほかに中国人留学生が一人いた。お互い発音が下手で何をいっているのかわからなかった。しかし、紙とペンを使いながら何とかコミュニケーションをとり、地図帳を見ながらお互いの国のことを話した。中国の歴史について日本で習ったことのない興味深い話をたくさん聞くことができ、中国という国を少し身近に感じることができた。

今回オーストラリアに行って、お互いに興味を持つということがコミュニケーションをとる上で重要なことだと思った。また、言語はコミュニケーションをとる手段の一つにすぎないということを肌で感じることができた。しかし同時に、海外に行ったらやはり英語が必要だということも痛感した。もう一度オーストラリアに行く機会があれば、今度は十分に英語でコミュニケーションがとれるようにしたい。

仲良くなった子供と最後の夜に

いつもと違う夏休み

社会福祉学科２年 高田　乃梨子

私たちが生活したのは、オーストラリアの南端のフランクストンというところでした。南といっても、南半球なのでオーストラリアと聞いて思い浮かべるような暖かい所ではなく、冬には雪が降るという土地で、８月のオーストラリアは思いのほか寒いものでした。ホストファミリーは50代の夫婦で、毎日いろいろなことを話し、一緒にテレビを見たり、出かけたりと二人とも本当に親切で、家族のように接してくれました。お母さんからはよく、料理の作り方を教えてもらいました。いつも初めて食べるような食事なので、毎食が楽しみでした。お父さんは私をからかったり、笑わせるようなことをよくしていました。ホストファミリー以外にも、たくさんの様々な国の人と出会い、遊んだり話しをしたりしました。どの出会いも忘れたくないものばかりです。

今でもおそらく三週間のいつの日のことも覚えています。全てが新鮮で、毎日が特別でした。南十字星を見たこと、海でイルカを見れたことも、ただの買い物や散歩も、日本で感じる事のないものを感じさせてくれました。また、普段は考えないようなことを考えるいい機会でもありました。大変だったことも少しはあったけれど、行って良かったと本当に思います。おかげで日本の良さも改めて実できました。

ホストファザーの作ってくれたバーベキュー（夕食）

韓国インジェ大学校との学生交流について

理学療法学科長　佐藤　秀紀

９月６日～８日まで、韓国インジェ大学校医生命工学大学物理治療学科との協定式に出席し、学科教員と多くの学生からの歓迎を受けてきました。協定はインジェ大学校物理治療学科のYong-Kwon Kim 学科長との間で行っています。多くの学生が出席していたため、学生達には、青森県立保健大学理学療法学科の紹介とわが国の理学療法士養成の現状について話をしました。聴講の態度は実に見事であり、本学の学生とのあまりにも大きな違いに驚かされました。

インジェ大学校は、韓国最初の公益法人である財団法人白病院にその基盤を置いており、医生命工学大学、医科大学、人文社会科学大学、自然科学大学、工科大学の５大学から成り立つ総合大学です。今回の協定校である医生命工学大学だけでも、物理治療学科以外にも、作業治療学科、医用工学科、臨床病理学科、生命工学科、食品科学科、産業安全保健学科の計７学科があります。

現在、物理治療学科では吉備国際大学と札幌医科大学の理学療法学科との学生交流提携を結んでいますが、現実には全く進んでいない状況です。今回の学科間の協定においては、計画の立案・実施など、本学理学療法学科の李助手の存在・役割が大きいものとなっています。

両学科における交流計画は次の内容です。

１）教員の交流
２）学術共同研究の実施
３）学術上の各種の資料、文献等の交換
４）学生の受け入れに関する協力
５）その他、両学科の教育・研究の交流の発展に寄与する事項となっています。

インジェ大学校のある釜山市は、福岡市と挟んで約 200キロメートルの距離にあり、韓国の表玄関として、長い間韓国と日本を結ぶ窓口の役割を果たしてきています。市内には地下鉄が走り、国際貿易港と国際空港を備えた韓国第二の都市として発展を続けています。また釜山市は、自然に恵まれ、活気あふれる魚市場や海水浴場など、観光都市として国内外の観光客の人気を集めています。協定後は、ここ釜山の食堂で、カルビや新鮮な海の幸いっぱいの歓迎をしていただきました。

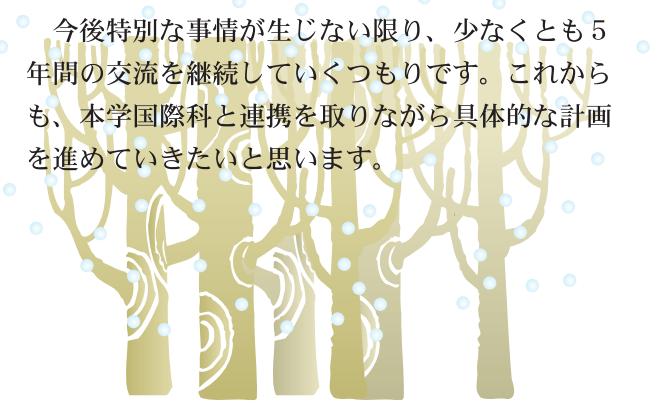
今年度は、学生の受け入れに関する協力ということで、韓国の学生４名を７月10日～8月14日まで受け入れ、本学学生４名を９月６日～15日まで受け入れてもらいました。今回のインジェ大学校における実習については、当学科３年生20名に希望者をつのったところ、６名が希望し、面接などを通して４名に絞っています。

実習先の一つである釜山インジェ大学付属病院では、病院の理学療法室の見学と病院の理学療法の特徴を説明していただきました。韓国の理学療法は伝統的に物理療法に主体がおかれています。そのため、運動療法に関しては、少し不十分な状態にあるそうです。しかし、わが国には、見られない水圧を利用して全身のマッサージ効果を期待する「アクア療法」など、目新しい療法を目にすることができました。近年スポーツ理学療法の分野でも発展が著しいので、本学学生にとっても学ぶべきものも多くなってくるものと思われます。

韓国は日本の最も近い国であるが、両国間の学生交流の密度がこの距離的近さに比例しているわけではありません。2002年、韓国と日本がワールドカップを共同開催することをきっかけに、両国が文化やスポーツなどの様々な分野で交流が深まってきています。

インジェ大学校における実習を通して、物理療法の知識・技術のみならず、学生には韓国の文化・言語・自然・社会などに関する知識を吸収して欲しいと思っています。また、韓国の学生との交流や、韓国の家庭でのホームステイなどにより豊かな国際的感覚を養ってもらいたいと思います。

今後特別な事情が生じない限り、少なくとも５年間の交流を継続していくつもりです。これからも、本学国際科と連携を取りながら具体的な計画を進めていきたいと思います。



理学療法学科学生における国際交流について

理学療法学科助手 李　相潤

近年、グローバル的なネットワークの構築により、世界の様々な情報は一層身近なものになっています。それに伴い、日本各地では多様な国際イベントや交流などが盛んに行われるようになりました。しかし、既存の国際交流では交流における中身よりも形式が重要視される傾向が指摘される場合も少なくはないです。即ち、これからの国際交流は量よりは質が求められるようになったといえます。そこで、青森県立保健大学健康科学部理学療法学科では、上記の状況を踏まえて、学生における異国での病院実習を通した国際交流を試みました。

本稿では、青森県立保健大学健康科学部理学療法学科と、仁濟大学校医生命工学大学物理治療学科における学生交流および研修の一部について、報告を兼ねて紹介したいと思います。

1、仁濟大学校での国際交流

平成14年9月16日韓国訪問の初日は、仁濟大学校との学生交流が行われました。日本と韓国の学生達は慣れない英語、日本語、韓国語の３つの言語を使い、一生懸命にコミュニケーションを取ろうとするのが印象的でした。

―交流会―

2、上渓仁濟大学校附属病院での実習

病院の特徴としては、24の診療科と30科の特殊クリニック、ベッド数771床を有し、ソウル東北部と京畿地域では最大級の未来指向型総合病院で、学生は電気治療を体験しました。

3、一山仁濟大学校附属病院での実習

一山仁濟大学校附属病院は、地下6階、地上10階、ベッド数600床規模の最先端の医療設備を備えている総合病院です。そして医療映像記録と伝達システム、入院処方伝達システムなどを備え、病院業務の完全電算化と Day Surgery の運用を行っている特長を持っています。とくに、韓国オリンピック選手などの治療を担当する程、スポーツ理学療法に力を入れている病院で、学生の実習は主に水治療を体験しました。

―水治療の実習―

隣国である特徴や長年の歴史などにより、日本と韓国には互いに相手国に対する多くの情報を持っています。特に食文化、住居文化をはじめ、医療システムなどの類似点はアジア諸国の中でも圧倒的に多いと思います。しかし、今回の国際交流の多くの場面では、上記に述べたような類似した生活環境や文化を持ちながらも、互いに相手の思考や意見に理解できず、戸惑いを隠せないこともありました。勿論、最初の国際交流で全て上手くいくとは思わないが、今回の反省点は次回の国際交流に繋げることが重要であると感じました。そして今後の理学療法学科における国際交流は、多様化される国際性豊かな人材の育成の一貫教育として、更に発展させていきたいと思います。

韓国での研修を終えて

理学療法学科３年 飯高　恵子

今回、韓国で釜山とソウルでの研修を行ってきた。この研修で印象に残ったのは、たくさんある。その中でも、インジェ大学の方には色々とお世話になった。韓国の学生が青森に来ているときには大学の試験期間であったため、あまり学生同士の交流ができなかった。そのためか、今回釜山でのインジェ大学の学生とは２日間ずっと行動をともにでき、短いながらも交流を持てた感じがする。色々と計画を立ててくれたようであった。来年、青森に来る学生は今回よりも学生同士の交流ができるよう考えていきたい。

今回の研修では、韓国の理学療法と日本の理学療法の違いを見てくることが主な目的であった。韓国ではペインコントロールに力を入れており、日本の現場であまり見ることのできない物理療法が行われていた。物理療法は理学療法士が自ら行っており、日本のようにアシスタント任せにはしていない。実習病院の先生によると「物理療法には薬のように体重あたりの用量など決められていないから患者の訴えを注意深く聞き、強度を、一人一人に合わせることで初めて意味がある」という言葉は印象的であった。

また、付き添いの人が患者をベッドまで移していたり、運動療法を手伝っていたり、日本では見られない光景があった。韓国の理学療法士は、ＡＤＬ（日常生活動作）をあまり勉強しないそうである。ＡＤＬは作業療法士の仕事だということだった。日本と分け方が違うので驚いた。どちらが良いとも言えないが、ＡＤＬを理学療法士が学ぶことは、有用であると思われた。四肢麻痺の患者さんのトランスは不安であった。日本の現場も、まだよく知らない段階ではあるが、大雑把な違いは把握できたのではないかと思う。

また、心臓に疾患を持つ患者さんの運動負荷テストを見たり、小児の運動療法を見せてもらったりと日本でもなかなかできない経験をさせてもらえた。10日間と期間が短く、忙しい研修ではあったが大変に有意義なものであった。

日韓交換交流に参加して

理学療法学科３年 岡元　紗矢香

今回私は、本学理学療法学科と韓国の仁濟大学校物理治療学科との間で行われた学生の交換交流事業に参加する機会を得ることができ、また、韓国から来た４名の学生との日本での交流や、韓国での学生との交流や病院実習から、多くのものを得ることができました。

ソウル市で行った病院実習では、理学療法における日本と韓国との相違点を実際の現場から学ぶことができました。運動療法を主とする日本の理学療法に対して、電気や光線、温熱などの物理的手段によって患者の疼痛を抑える物理療法を重視した理学療法が、韓国では盛んに行われていました。単なる見学ではなく、実際の理学療法現場での実習という形で物理療法の治療概念や治療方法を学ぶことによって、その重要性や必要性を肌で感じることができました。今回韓国で学んだ事柄を、将来臨床現場に出たときに活かしたいと思います。

ソウル市での病院実習のみならず、釜山市での仁濟大学校の学生との交流も充実したものとなりました。韓国の学生と過ごした３日間で、日本とは異なる韓国の生活や文化について多くのことを学ぶことができました。言葉が障壁となることもありましたが、英語や身振りなど使い得るあらゆる手段を用いて、私たちはお互いのことを分かり合うことができたような気がします。仁濟大学校の学生との交流は本当に楽しく、一生忘れることのない数々の貴重な思い出を作ることができました。この機会を通して得ることのできた多くの韓国の友人たちと、今後も交流を続けていきたいと考えています。

今回の国際交流事業に参加することによって、日本だけではなく世界にも目を向け、国際的な視野を広げるきっかけを作ることができたように思います。最後に、私たちにこのような貴重な機会を与えてくださった青森県立保健大学および関係職員、韓国仁濟大学校に心より感謝申し上げます。

お/ろ/し/あ/訪問記

理学療法学科3年 朝田　伸治

皆さんはロシアについてどのような印象をお持ちでしょうか？

第二次世界大戦後のシベリア抑留からソビエト連邦時代の鉄のカーテン、北方四島問題などの暗いイメージが多くを占めているのではないでしょうか。しかし夜中にラジオのダイヤルを回してみて下さい。国内放送やハングルと並んでロシア語の放送が耳に入ってくるはずです。晴れた日なら宗谷岬からサハリンを眺める事ができ、青森から飛行機のシートに２時間身を預ければ日本海を飛び越えシベリアへ降り立つことができます。ちなみに２時間飛行機に乗れば私の故郷大阪に着きます。それだけロシアは「近い国」なのです。

青森県とロシア･ハバロフスク地方は友好協定を結んでいて、隔年毎に双方から訪問しており、今年は青森県から派遣する年にあたることから私は31人の団員と共にこの交流事業に参加しました。全８日間のうちハバロフスクに６日間、そして航空機製造工場で有名な地方都市、地理的にはハバロフスクから北へ約400kmに位置するコムソモルスク･ナ･アムールに２日間滞在しました。さらに、今年は交流事業の記念年にあたることから我々だけでなく県知事も同行され、当地では青森dayとして劇場で津軽の伝統芸能が披露されたり、シベリア抑留における犠牲者を弔う日本人墓地への墓参など、その模様はTVでご覧になられた方もいられると思います。

この交流事業は一般のツアーとは趣きが違い、市内観光以外に青少年施設（郊外のキャンプ場）への訪問や大学生との討論会、航空機工場見学なども含まれていました。

当地の街並みは欧州と変わらず、いたるところに緑が多く、それでいて中国との国境が近いからなのか東洋の趣が含まれていて、初めて訪れた土地にしてはわだかまりもなく順応できました。思えばアムール川に代表される自然の雄大さと、欧州でありながらも洗練されていない人間臭い町並みが異国でも心を落ち着けたのかもしれません。

ハバロフスクを代表するアムール川ですが、川幅は4,440mある緩やかな大河です。気候は日本とは１時間の時差（夏季のみ２時間）があり、夏季は白夜で夜の９時を過ぎても昼間のように明るく一日が長く感じられます。さらに、夜になり頭上を見上げれば今にも降り注ぐようなあまたの星が美しく、特にその星群から北斗七星を見つけることができたことには心から感動しました。シベリアは夏でも涼しいと思われるでしょうが、意外と昼

夜問わず湿気はないものの青森より暑さを感じて持参したTシャツが１日で汗まみれになるほどです。

ロシア料理は肉だけでなく魚もふんだんに使われて美味しく、毎日の食事が楽しみだったのですがやはり生ものを食べる習慣が無いので全体的に脂っこく、胃への負担が・・・・。

なかでもアイスクリームがとても美味しかった！

アイスクリームはロシア名物で、街角のいたるところにスタンドがあり、コーンに計り売りしてくれます。値段は大体５ルーブル（約20円）でミルクの味が濃くて甘味が程よくお薦めです。

青森県の交流事業で訪問したので、宿泊したホテルはその街では良い設備を備えていましたが、コムソモルスク･ナ･アムールのホテルでシャワーのお湯が出ず、水で体を洗ったことと、街中のどのトイレに入っても便座が外された便器のみで、下手すればドアさえなく用を足すのに戸惑ってしまいました。

ロシア人は普段は真面目ですが、騒ぐときは陽気で、酒が強い。特に乾杯するたびにウォッカをおちょこ程のグラスに注いで一気に飲み干すのですが、帰国前夜のパーティーで気の合ったロシア人と何度も乾杯をしてしまい４０度のウォッカを一瓶空にして帰国の機中で二日酔いに苦しめられました‥‥。あと、ロシア人はとても自分達に誇りを抱いている事です。ちなみにW杯の日本―ロシア戦については「あの試合、俺たちは１０人で戦ったんだ」と苦笑していました。

今回の訪問でロシアの全てを垣間見る事はできなかったでしょう。ただ、青森から僅か２時間で私達とは違う文化と、豊かな自然を持つ国に住む人達がいることを知っただけでもよい経験になりました。

自治会長を務めて

自治会長/理学療法学科3年
樋口　大輔

私が学生自治会の会長を務めて２年目になりますが、今年度とうとう４学年全てが揃うこととなりました。160人×４学年で計640人です。特に食堂は混み合って、なかなか昼食にありつけないこともしばしばあったのですが、現在では新しい食堂もでき、以前よりは混雑具合も改善できていると思います。一方で、サークル活動も盛んになってきていると思います。去年以上に活動が盛んになったサークルもあります。今後は円滑なサークル活動ができるよう、自治会長として働かなければならないと考えているところです。

私が大学祭実行委員長や自治会長などの仕事を務めて、様々なことを経験することができました。これは私の財産として今後の学生生活だけでなく就職をした後の生活の中で生かされるでしょう。ここで私が自治会長を務めることで得られたことをいくつか紹介したいと思います。

第１に、自主性がついたと思います。自治会長は学生自治会の長である私が動かないと話が先に進まないこともいくつかあり、そのような仕事を受けていくうちに「まずは自分がしなくては」という気持ちが強くなりました。私たち本学学生の多くは病院や老人保健施設などの医療・保健・福祉分野にて活躍すると思うのですが、活躍する上で大切な要素の１つとしてこの自主性が挙げられると思います。というのも、我々がなるであろう職種というのは人対人を基本とし、専門技術をサービスとして提供するものであると考えますが、もし他人に依存するような態度では技術を向上することはできないと思います。引いては、その技術をサービスとして受ける方へ満足してもらえないということにもなりかねません。まずは自主的に最先端の情報を吸収し、それを自分の技術へと反映する努力が必要であると考えます。私は自治会長を務めることで、学生生活のうちに自主性を磨く良い機会を得ることができたと思います。

第２に、自分の意見を持って、それを述べることができるようになったと思います。今までは自分の考えを持っていたとしても、それを十分に相手に伝えることができませんでした。自治会長を務める中で、教務学生課の方や先生方、各種委員会のメンバーと話し合う機会を多く持ちました。そのような状況では自分の考えを持って、相手に分かってもらえるように努力する必要があり、そのような経験を経て自分の考えを相手に伝えることができるようになったと思います。しかし、相手の意見を十分に聞けたかどうかということになると、疑問符が残るような気がします。今後は、自分の意見を一方的に述べるだけでなく、相手の意見を尊重できるような対人関係におけるスキルを磨いていかなければならないと思います。これは、職場で働く上でも重要であると考えます。というのも、自分の専門技術を一方的に提供するのではなく、サービスを受ける方の意見もうまく取り入れつつサービスの提供をしていかなくてはならないからです。

第３に、仲間の大切さを感じることができました。仲間が大切であると漠然と思ってはいましたが、身をもって体験することができました。学生全体において自治会の構成員であるという意識が欠けており、このような状況で、私は十分な成果を残すことができなかったこともありました。これは学生だけが悪いのではなく、私のリーダーシップ不足も原因だと思います。しかし、まったくサポートをしてくれる学生がいなかったということではなく、幾人かの学生のおかげでやり遂げることができた仕事もありました。県立保健大学祭がその仕事の１つです。大学祭という年間の行事の中でも一際大きなイベントを成功のうちに終えることができて、「１つの大きな仕事でも、分担することでやり遂げることができるのだ」と私は感じることができました。この考えは今後も変わらず続いていくでしょう。

最後になりましたが、自治会長を２年間務め上げ、そろそろ後輩に自治会長という学生代表の職を譲る時期に差し掛かってきました。私としては是非とも後輩にも私と同様の経験をしてもらいたいと思います。最初は戸惑うことも多いと思いますが、きっと良い経験ができたと感じられるでしょう。

みんなの協力の下に

大学祭実行委員長/社会福祉学科2年 大友　隆幸

去る10月12・13日に行われた第４回県立保健大学祭は昨年以上と思われる盛り上がりを見せ、盛況のうちに終わることが出来た事をうれしく思っています。今年度の大学祭のテーマは「Hand Made」ということで、学生全体による手作りで温かみのある大学祭を目指しました。また、今年度の大学祭では昨年度までには見られなかった新たな催し物がたくさん行われました。CREEPSの無料ライブ、公開ディベート、Music festival、フリーマーケット、幼稚園児の絵画展、中夜祭、後夜祭でのキャンプファイヤーとその内容は盛り沢山でした。

大学祭の実行委員というのは大きく、会計、広報、企画、物品という各部門に分かれています。実行委員は各部門に分かれて大学祭の準備作業をしてきました。ここで、今年度の大学祭で私を支えてくれた各部門の代表者に、一言ずつ感想を書いてもらいましたので紹介します。

●会計代表者　松田 友美さん（看護学科２年）

こんにちは。大学祭実行委員・会計の看護学科２年の松田友美です。大学祭にきていただいた方々、楽しんでいただけましたでしょうか？運良く天気にも恵まれ、誰よりも実行委員自身が楽しんだ大学祭でした。

さて、私がやっていた仕事は会計という一見地味な仕事です。安易な気持ちで引き受けたのはいいものの、渡された通帳の中には大学祭の全予算。お金を扱う重要さをひしひしと感じ、「これを盗まれたら困る！」と一人緊張して校内を歩いていました。退屈な日常に飽きている方、会計の仕事はお勧めです。これはなかなかのスリルです。

今回私がやった仕事はたまたま会計という部門でしたが、何より実行委員の一人として皆さんとともに大学祭という一大イベントに関わることができて本当によかったです。ありがとうございました。

●広報代表者　大山　潮さん（社会福祉学科２年）

始めに青森県立保健大学祭におこしいただいた皆様、また大学祭に協賛して下さった65企業の皆様本当にありがとうございました。そして、連日の猛暑の中、着慣れないスーツを着て、足を棒にして企業広告を集めた広報委員のみんな。パンフレットの後半部分を占める膨大な企業広告は、私たち広報委員全員の努力の賜物です。みんな本当にお疲れさま。協賛していただいた企業の皆様の中には、至らない対応のため不愉快な思いをされた方もおられると思います。申し訳ありませんでした。そして貴重なアドバイス、ありがとうございました。この広報活動が私たちにとって貴重な人生経験になったことを私は信じて疑いません。最後に、大学祭に関わったすべての人たちへ、本当にありがとうございました。

●企画代表者　藤井　光代さん（理学療法学科2年）

今回の大学祭企画で一番大変だったことは、学生がやりたいことを「形」にすることでした。やりたいことを口にするのは簡単ですが、それを実行するときには必ずといっていいほど制限が生じます。この制限をクリアーするために何度も周囲の意見に耳を傾け、時には意見の衝突を繰り返しながら計画の練り直しをしました。大学祭当日の印象は、あれほど時間をかけて練り上げた企画だったにもかかわらず、当日はあっという間に過ぎ去り、企画当事者としては本当に大学祭を行った

のか実感がないというのが本音です。今回の大学祭を通し、皆さんの心にどれほどの思い出が残ったかはわかりませんが、来年、再来年と青森県立保健大学祭が進化していくことを祈っています。最後に、大学サイドの協力体制に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

●物品代表者　高橋　玄央さん（社会福祉学科2年）

私は今年で二回目の実行委員の経験をしました。しかし、去年と異なることは、実行委員の中心となったことです。私は主に物品の責任者として仕事をしました。しかし至らない点も多々あり、物品に配属された実行委員や、実行委員長に数々の迷惑をかけてしまったことを申し訳なく思っています。来年は今年の反省点を生かして、更なるスムーズな物品の移動・管理体制を築いてもらいたいと思います。

さて、大学祭自体はというと、今年四回目にして最大の規模を迎えたのではないでしょうか。内容も充実しており、実行委員はもとより、さまざまな方々の協力を得て一つずつ、まさに Hand Made な大学祭になったと感じています。皆とともに手作り成功させたことの達成感と充実感は何よりも得られがたい素晴らしい経験となりました。来年は、今年よりもより良い大学祭・中身の濃い大学祭になることを願っています。後輩の皆さんの奇抜なアイディア・奇想天外の発想をもとにしたオリジナルな大学祭を築いてくれる事を期待しています。

以上のように大学祭は決して自分ひとりの力で成しうるものではなく、実行委員一人一人の活動が総体となって出来ています。私も実行委員のみんなに何度となく助けられました。ではここからは私の感想を書かせていただきます。

私は昨年度も実行委員として大学祭の運営に携わっていました。そして今年度は実行委員長として大学祭を迎えることとなりました。実行委員長になった今年度、初めは何もわかりませんでした。どの時期で、どの段階でポスターを作成するのかすらわからず、右往左往するばかりでした。しかし、周りの人からの協力をもらい、次第に大学祭の準備も軌道に乗り始めました。企画については今年度新たに挑むものが非常に多く、その準備段階から実行委員会で何度となく話し合い、報告、確認しあいました。しかし、実際に出来る企画は限られてしまうので、準備の段階で消えていった企画も幾つかありました。その都度話し合いが持たれ、意見交換が行われました。そこでも実行委員のやる気というのが強く感じられました。

そして大学祭当日を迎える事となったのですが、当日の二日間は本当にあっという間に過ぎていきました。私には校内の巡回、テレビ撮影、迷子の世話と次から次と仕事が舞い込んできました。非常に忙しかった反面、とても充実した二日間でもありました。新たに挑んだ企画も成功を収め、実行委員みんなで喜びを分かち合えた事は私にとって最高の思い出です。

最後に、この紙面を借りて大学祭実行委員一同を代表し、大学祭を実行するにあたり協力してくださったたくさんの方々には非常に感謝しています。本当にありがとうございました。そして１年生に、来年は今年度より素晴らしい大学祭が開催される事を期待しています。

バレーボールサークル

社会福祉学科3年 吉本　芙美
（顧問/田﨑　博一教授）

私たちは、週２回体育館で活動しています。現在は２年生が中心となり活動を支えてくれています。ただ、徐々に実習などで実際に活動に参加できる人は減ってしまってしまうのが残念なところです。

ほとんどが学内の活動ですが、年に2、3回公立大学との交流試合を行っています。この交流試合には、普段あまり活動に参加できない人も多く来てくれるので毎回大変盛り上がります。

バレーボールサークルは、皆が「楽しく」バレーをすることを目標としてやっています。この「楽しく」とはどういうことなのか、バレーを部活で経験してきた人とそうでない人の間には少なからず捉えかたに差が生まれていることは確かです。

しかし、バレーボールの経験に関係なく、バレーをすることで皆が仲良くなり、学内での輪が広がれば素晴らしいことだと思います。そしてそれが本来のサークルの目的なのではないかとも思います。誰でも参加できて一緒にワイワイやるサークルが私たちの「バレーボールサークル」です。

今年はけが人が多く出てしまったこともあり、けが予防のためにストレッチやウォーミングアップを徹底させる取り組みを行ったりもしました。「楽しむ」ためにはしっかりした安全対策が必要だということを見落としてしまっていたと反省しました。基本的に自分の体は自分で守らなければなりませんが、サークルとしてその認識を皆に持ってもらえるようにしていきたいと思います。

フォトサークル

看護学科3年 登坂　理加
（顧問/勘林　秀行講師）

フォトサークルは、１年ほど前に発足したサークルですが、本格的に活動を始めたのは今年の夏からです。サークルを発足させるところまではよかったのですが、暗室も部室も道具もない！ということで活動をはじめるまでにかなり時間がかかりました。活動期間は、空き時間があるときに行うという具合です。主に白黒写真の現像・引き伸ばしを行っています。フィルム作りからはじめて、撮影したものを暗室で現像し、引き伸ばしまで行います。個人での活動が多いですが、経験者・初心者に関係なく、写真を楽しむことをモットーとしています。また、カメラを持っていない人には、貸し出しを行ったりもしています。

現在部員は17人おり、ほとんどが初心者です。実は私も初心者で、うまく活動ができるかと不安でしたが、いろいろな方々の協力でなんとかやっています。以前は部室がなく、活動が難しかったのですが、現在は部室内に仮の暗室をつくり、そこで活動しています。白黒写真は奥が深く、難しいところもありますが一度現像すると、時間を忘れてしまうほどの魅力があります。大学祭では、日本文化研究会と合同で和風カフェを行い、写真の展示も行いました。今後は、写真の撮影会や講習会なども行っていきたいと考えています。発展途上のサークルですが、写真に興味がある方、現像してみたい方、フォトサークルで一緒に写真を楽しみませんか？

看護学科 Pamela Minarik

Letter from Pamela Minarik

To all in the Department of Nursing, Thank you!
I can't thank you enough for the lovely gifts, wonderful farewell parties, help with computers and address books and my office, and especially seeing us off at the airports. I am so sentimental, that I was teary-eyed most of the time. I miss you very much, and look forward to February when I can see you again. I believe I am very lucky to have worked with all of you. Whenever anyone asks (and they all do) about how I liked living in Japan, I tell them how wonderful you are and how beautiful Aomori is.

I wore my yukata and geta (and managed to tie the obi by myself, thanks to my lesson from Nakamura-sensei) to Dean Gilliss' Welcome back to school picnic buffet in her backyard in early September. They said I was starting to look Japanese. I thought that was a compliment. I also wore the yukata and geta (and again tied the obi by myself) to my stepmother's 80th birthday party in California this past weekend. Everyone really liked it and I felt quite comfortable. Now here in Connecticut, it is more rainy although still warm so I may not have more opportunities to wear it. Leaves on the trees in my yard are starting to turn autumn colors.

Jet lag resolved after a little more than a week but sometimes I feel I am still in culture shock. My work has been very busy since the moment I returned. At Yale New Haven Hospital, I have seen many patients who are in crisis or depressed and their families, and met with staff members about their problems working together in a stressful environment. Some things have changed but in many ways, it is like a soap opera, you can tune in at any time and find familiarity (although this is definitely not Sakura). I am glad to be involved in clinical work as a psychiatric consultation liaison CNS again.

At Yale School of Nursing, most of my energy is directed at creating the Office of International Affairs–definitely a steep learning curve. It is exciting, full of new ideas and possibilities, and I am meeting many new people. I look forward to creating opportunities for faculty and student exchange between AUHW and YSN.

At home, I am still unpacking and settling back into the house. Lonnie helped for two weeks (especially with buying a car--1998 Subaru Forester, of course a Japanese car) then returned to Aomori to teach until the end of the academic year. The shipping company will deliver the boxes sent by sea tomorrow morning so then there will be more unpacking! Our yard is completely overgrown and I have not had much time to do gardening. I guess I need the help of someone with a terrific green thumb like Professor Sagai.

It is late now and I am going home. Please write to me. I would love to know what is going on.
Take care,

Pamela

はじめての地域統合実習

看護学科助手
工藤　奈織美

地域統合実習は，青森県全域の保健所・市町村・訪問看護ステーションの合計86施設において、５週間行いました。学生は電車やバス、車で移動し、遠いところはホテルや旅館、実家に宿泊しながら実習に臨みました。その際ご父母の皆様に大変ご協力いただき、お陰様で無事に実習を終えることができました。ありがとうございました。

臨床実習を終えた学生は、“健康な人”も含めたすべての住民を対象とする地域看護活動や、病気をかかえながら自宅で生活している方を対象とした在宅看護活動に驚き，感動し、実習を進めていきました。

左下の写真は健康教育の一場面です。いつもは保健師が行いますが，この日は学生が指導案を作成し、教材を作り、住民を相手に悪戦苦闘していました。学生の緊張した面持ちに、「学生さん！若いんだからがんばれぇ～！」とゲキが飛びます。(写真①)

写真①/健康教育の1シーン
「骨粗しょう症を予防しよう」みんなで身体を動かそう

また「地区診断」という“地域を知る”ために学生が町内を回って住民から話を聞き、より深く地域というものを理解する実習も行いました。(写真②)

写真②/地区診断「ここはどんな町だろう?」

大学を離れての実習で不安もあったようですが，市町村や訪問看護ステーションでは１～２人という少人数で実習したので細かな部分まで指導してもらえて、楽しくできたようでした。(写真③)

写真③
訪問看護ステーションで楽しく実習しています。

このように地域看護・在宅看護活動は、生活者の視点なくしては存在し得ないものだと、学生は実感できたのではないかと思います。

総合臨床実習を終えて

理学療法学科講師
勘林　秀行

理学療法学科のカリキュラムの総仕上げとも言える総合臨床実習が今年度初めて実施され、第Ⅰ期生20名は全員無事に合格しました。学生達はもちろん、学科の教員全員ほっとしているところです。実習に向けて万全の準備をしたつもりでも、いざ実習が始まると何が起こるか分からないといつも心配しておりました。総合臨床実習は、それまでに学んだ知識・技術を実際の臨床の場に応用し、臨床実習指導者の指導のもとで理学療法士としての総合的技能を身につけるためのものですが、学校を離れ、6週間を3ヶ所、一人病院という世界に放り込まれることになります。病院スタッフや患者様との人間関係で悩んだり、理学療法の知識や技術で行き詰まったり、今までに味わったことのない未知の環境の中で様々なストレスを感じたことでしょう。中には、初めて親元を離れて自炊するなど、生活面でも苦労したと思います。一部追加の実習をした学生もおりましたが、それでも学生達は皆試練を乗り越えて、逞しくなって帰ってきました。臨床実習指導者の先生方には本当に感謝しております。

さて、今回の総合臨床実習について、学生と臨床実習指導者にアンケート調査を行いました。また、10月4日㈯に臨床実習指導者会議を開催し、指導者の先生方からご意見やご要望などをお聞きしました。学生達は、学習面だけでなく人間関係

や生活面でも苦労したようですが、臨床実習指導者の指導によって自身の臨床における能力が徐々に身に付いたと感じており、実習の目的が十分に達成されたと思われます。しかし一方で、殆どの学生が学内での学習と臨床とのギャップを強く感じている事が分かりました。指導者の先生方からも、実習の初めの頃は患者様とうまくコミュニケーションがとれなかった、患者様に慣れていない、理学療法の知識・技術を臨床場面でなかなか応用できないなどの指摘を受けました。

これらの最大の原因は、2年後期の臨床評価実習から総合臨床実習まで1年以上もの期間が空いていることです。新カリキュラムではその点は改善されていますが、現在の１年生までは現行のままです。この課題に対応するために、Ⅱ期生からは実習直前に補習を行うなどの対策が必要であると考えています。また、個々の授業内容についても臨床に繋がるようにするとともに、授業科目間の調整を行い、学生達が自信を持って実習に臨めるようにしていきたいと思っています。

第Ⅱ期生の実習が目前に迫っており、準備作業も最終段階となりました。実り多い実習になるように、今回の総合臨床実習の経験を生かしていきたいと思います。

現場実習を担当して

社会福祉学科助教授
佐藤　恵子

社会福祉学科では、現在、以下のように１年次から４年次まで段階的に実習を配置しています。１年次【社会福祉体験実習】→２年次【社会福祉基礎実習】→３年次【社会福祉援助技術現場実習】→４年次【社会福祉応用実習】

ここでは、中心となる社会福祉援助技術現場実習（現場実習）について報告します。現場実習は、概ね９月初旬から10月中旬までの期間に、約１週間の中休み（振り返り期間）をはさんで、前半２週間、後半２週間の計４週間の日程で実施しています。県内の各種社会福祉施設や児童相談所、福祉事務所などで、それぞれの業務の実際を体験し、利用者の生活課題やニーズ、チームワーク・アプローチ、援助方法､他職種との連携や社会資源などについて理解するとともに、社会福祉援助技術者としての問題解決能力を高めることを目指しています。昨年度は、38名の学生が26の施設・機関で、今年度は39名の学生が28の施設・機関で実習を行いました。

昨年度は、本学科として初めての実施であったため、学生はもちろん、送り出す教員側も、受け入れて下さる施設側にとっても、様々な面で戸惑いや予想外の事態が生じ、対応に追われました。まず、３年生全員の実習先を決定するまでの調整がたいへんでした。こちらで設定した実習時期や期間が、受け入れ施設側の都合と折り合いがつかず、結局断念せざるを得ないケースもありました。また、学内での履修登録や追・再試験などの日程とのバッティングもあり、対応に苦労しました。その他、実習先への通勤手段の問題や実習記録の様式、評価方法等に関わる問題など、初年度ならではともいえる様々な問題に直面しました。それでも、全体としては大きなトラブルもなく、全員が無事実習を終えることができました。

11月に行った報告会では、それぞれの実習先で経験した戸惑いや厳しさ、喜びや感激などが率直に語られ、講義では決して学ぶことができない現場での直接体験を通して、学生たちが確実に成長している様子が窺われました。

今年度の実習は、昨年度の経験をふまえて実施した結果、概ね順調に経過し、10月中旬までに全員が無事終了し、現在、11月末の報告会に向けて準備を進めているところです。

総合福祉センターなつどまり

公開講座実績

第1回目公開講座で講演する曾野綾子氏

本学公開講座委員会では、平成11年度の開学以来、毎年計４回の公開講座を実施しています。

今年度も「こころと健康」を基本テーマに以下のとおり実施しました。

《第１回目　6月3日(月)》「人間性とは何か」
講師：曾野綾子（作家）

《第２回目　6月28日(金)》
「コミュニケーションによる人間関係の構築－これからの家族間コミュニケーションを目指して－」
講師：赤坂和雄（健康科学研究研修センター国際科長、理学療法学科教授）

《第３回目　10月12日(土)》
❶「『雪国』の生活と健康 ～係った調査研究に基づいて～」 講師：杉山　克己（社会福祉学科講師）
❷「女性の体を傷つける文化を考える」 講師：千葉たか子（社会福祉学科講師）

《第４回目　10月26日(土)》
❶「健康と呼吸との深い関係 ～体とこころは呼吸でつながっている～」講師：山下弘二（理学療法学科講師）
❷「あなたの災害対策大丈夫ですか？－災害時のこころとからだ－」 講師：上泉和子（看護学科長、教授）

教職員親交会〈バーベキューパーティ〉

親交会長 米澤　國吉
（社会福祉学科教授）

本学教職員親交会は2002年度のレク行事として、9月28日夜越山（平内町）でバーベキューパーティを実施しました。当日はあいにくの雨にもかかわらず約40名が参加。初秋の一日、焼肉を味わい語らいの輪が広がりました。お子さんと一緒に参加した家族も多く、雨の中小高い丘を駆け巡る子供たちの歓声が夜越山にこだまし、集いを一層楽しいものにしてくれました。当日は（10月から）新しく親交会のメンバーになられたリボウイッツご夫妻も出席され、参加者との親睦を深められました。

先発隊として現地で準備して頂きました、秋元、江西、盛田、石井の皆さん、前日から買出し等奔走して下さいました廣森さんはじめ多くの皆さん、有難うございました。

学長新道先生からは多額のカンパを頂き紙上をお借りし心よりお礼申し上げます。

献血運動に対する感謝状贈呈

◎日時／平成14年7月25日㈭

昨年は青森市献血推進協議会長（青森市長）から感謝状をいただきましたが、今年度は平成14年度青森県献血運動推進大会において、献血事業に貢献し、功績があったとして、青森県知事から本学に対して感謝状が贈呈されました。

教育研究C棟紹介

総務課長 小野　勝義

平成１４年８月から教育研究Ｃ棟（旧高等看護学院）が１階部分を主体に供用開始されたので、１階を中心に簡単に紹介します。

１階には、本館部分に学生自治会室、学生就職情報室・相談室、学生談話室２（ロビー１か所）、学生用会議室及び資料作成用のコピー室が、旧寮部分にはサークル室20部屋、礼法室、会議室を備えた学生棟があり、その間には114席の軽食堂を兼ねるコミュニティホールの厚生棟があり、ここには各種の自動販売機が置かれています。また、その他に図書館分室と閲覧室（アップルズルーム）も配置していますので、教育研究、就職活動、サークル活動、仲間同士の懇談、食事などに大いに活用してほしいと思います。なお、高等看護学院メモリアルルームとして記録資料室もありますので、そこで見知らぬ人と会ったら気軽に声をかけてみて下さい。

２階は健康科学研究研修センターを中心としたフロアで、研修室、演習室、動物実験室等の他に遠隔ケアシステム研究研修室があり、ここには看護学科卒業研究のためのパソコンが現在５台設置されています。このフロアは、教育研究Ａ棟と渡り廊下で繋がっており、雨の日には大変重宝です。

３階は大学院を中心としたフロアで院生研究室、教員研究室等の他に助産課程の講義（実習）室があります。

全面供用開始については、図書館分室の配架、２・３階の各部屋への教育研究機材等の搬入、動物飼育室整備工事の完了等を待って、来年４月を予定しています。

この教育研究Ｃ棟は、エレベーターとスロープの新設、トイレの改築によりバリアフリー化し、誰でも訪問できる施設をコンセプトに全面改築したものです。

最後に、利用についてのお願いです。利用していない部屋等で照明が点いているのを見かけたら消灯して下さい。皆で省エネに努めましょう。

Ｃ棟正面玄関

コミュニティホール

院生研究室

談話会　研究談話会 ～教員･学生の学術交流の機会に～

看護学科教授
田﨑　博一

健康科学研究研修センター・研究開発科では平成11年の開学当初より、研究成果発表と学術交流の場として研究談話会を開催してきました。専門が多岐にわたる教員構成ですので、話題をどれだけ共有できるかという懸念がありましたが、回を重ねるにつれてさまざまな視点から意見が飛び交うようになり、刺激的で有意義な集まりになっています。テーマによっては学生や学外研究者の参加もあり、今後の会運営の方向性を示すものと考えています。平成15年以降は大学院生はもちろんのこと、卒業生にも門戸を開いた新たなスタイルが模索されることになるでしょう。

以下、平成13年度・14年度の発表演題と発表者を記載します。

平成13年度

第1回：
①被占領下における医療および看護政策とその実施－1945～1951－：島崎玲子(看護学科教授)、②胎児または早期新生児と死別した母親の悲哀過程－悲嘆反応の様相－：大井けい子（看護学科助教授）

第2回：
①家族システムを評価する尺度の研究について：中村由美子（看護学科助教授）、②在宅高齢脳卒中片麻痺者の日常生活活動に影響を及ぼす要因－構造方程式モデルによる分析－：盛田寛明（理学療法学科助手）

第3回：
①リハビリテーション医療における職種間連携の実態と看護職の課題：石鍋圭子（看護学科教授）、②痴呆性高齢者福祉施策への課題－東京都における痴呆性高齢者の現状と福祉対策から－：露木敏子（社会福祉学科助教授）

第4回：
①脳卒中患者における脳病巣の表示をもっとわかりやすくしよう－脳病巣の３次元的表示の開発－：福田道隆（理学療法学科教授）、②短期海外研修報告－西ベンガル州（インド）の農村で社会開発を行っているNGOの活動視察－：千葉多佳子（社会福祉学科講師）

第5回：
①北米におけるHealth Communication研究と教育－健康を保つコミュニケーション教育の重要性をめぐって－：赤坂和雄（人間総合科学科目教授）、②米国看護継続教育センターにおけるフィジカルアセスメントの研修をうけて：藤本真記子（看護学科助手）

第6回：
A Global Problem and A Local Solution
－ Nursing Staff Turnover in Hospitals：
Pamela Minarik（看護学科教授）

第7回：
①病院／患者図書館の医療における意味と青森県における実態：木幡洋子（社会福祉学科助教授）、②女性問題と女性福祉：佐藤恵子（社会福祉学科助教授）

平成14年度

第1回：
狂牛病とヒトCreutzfeld Jacob病の関連について－牛肉はほんとうに安全か－：尾崎勇（理学療法学科助教授）

第2回：
大気の汚れで気管支喘息は起こるのか？－原因としてのディーゼル排ガス対策と一研究者の葛藤－：嵯峨井勝（人間総合科学科目教授）

第3回：
①雪国の健康研究の概要と画像伝送システムについて：岩月宏泰（理学療法学科講師）、②除雪は健康づくり運動として期待できるか：山下弘二(理学療法学科講師)

第4回：
①地方都市におけるHomeless Mind（故郷喪失者）の老後不安－八戸・むつ市調査の一断面－：三栖郁子（社会福祉学科教授）、②青森のシャーマニズム文化と精神保健：藤井博英（看護学科助教授）

第5回：
①直腸癌低位前方切除患者の術後経過期間別の排便障害と自尊感情との関連について：藤田あけみ(看護学科講師)、②開発途上国の結核対策における地域看護の役割に関する情報収集：山田典子（看護学科講師）

第6回：
抗酸化作用を持つアミノ酸の腎障害モデル動物への影響：佐藤伸（人間総合科学科目助教授）

平成14年度就職対策活動状況について

就職対策専門部会長
（人間総合科学科目教授）
佐藤　正昭

いよいよ今年は本学１回生である４年生にとって、就職等の自分の進路を決める大切な時であります。

現在、４年生は卒業研究、国家試験の準備に汗を流すとともに、自分にとって重要な就職活動に積極的に取り組んでおり、多忙な毎日を過ごしています。

本学が初めて社会に送り出す１回生の就職状況は、保健医療福祉分野の人材育成を目指している本学にとりまして極めて重要なことであるとともに、２回生以降の後輩達にも大きな影響を与えるものであります。

このようなことから、本学としては１回生の就職対策を重要課題の１つとしてとらえ、様々な取り組みを行いながら、全学を挙げて一人ひとりの学生の就職活動の支援に努めているところであります。

【現在までの活動状況】

1.「就職用パンフレット」及び「求人票」の配布（４月）

「就職用パンフレット」及び「求人票」を県内外の病院・社会福祉施設（625件）に配布し、１回生に対する求人依頼を行った。

2. 県内の病院・社会福祉施設を訪問（４月～７月）

県内の病院・社会福祉施設の施設長・人事担当者に求人依頼及び情報提供を依頼した。

3. 関係団体の会議に出席（４月～７月）

保健医療福祉における県内の関係団体の会議に出席し、本学の就職に対する協力を依頼した。

4. 県内関連施設長責任者会議の開催（８月～９月）

県医師会及び県内2会場（弘前市、八戸市）において、病院・社会福祉施設の関係者と意見交換をし本学をＰＲした。

5. 就職合同説明会の開催（９月）

県内の病院・社会福祉施設の関係者と学生（３・４年生）が個別面談をする場を本学内に設け、積極的な意見交換を行った。

6. 学内公務員試験対策講座の開設（４月～９月）

自治体病院を希望する学生を対象に「公務員試験(教養)」対策講座を学内に開設した。

7. 公務員試験における２次試験対策（８月～10月）

１次試験の合格者に対して、２次試験対策（面接、作文試験）を行っている。

8. 就職ガイダンス（７月、９月、11月）

４年生を対象に就職ガイダンスを開催し就職指導を行っている。

３年生に対しては11月に第１回就職ガイダンスを開催する。

【現在までの動向】

就職は人生における一大事であり、学生にとっても、大学にとっても最大の関心事です。

多くの学生が、夏休みに病院や福祉施設を見学をするなど積極的に取り組んでおり、就職試験等に挑戦し内定者も出てきています。10月から12月にかけて就職内定の山場となるもので、一人ひとりの学生の実情に即したきめ細かな支援に努めていかなければなりません。

今後とも、開学の趣旨を大切にしながら就職対策に取り組むことにしていますので、更なる協力を願うものであります。　（平成14年10月30日）

就職合同説明会(9月)の様子
場所：保健大学Ｃ棟1Ｆ「コミュニティーホール」

大学院（健康科学研究科／修士過程）平成15年4月開設予定

～本年12月末、文部科学省の認可に期待高まる～

青森県立保健大学・大学院開設準備委員会
委員長 嵯峨井　勝

1. 大学院設置認可申請までの経過と現状

本学では、平成15年3月に待望の第1期卒業生が誕生します。本学では、この1期生と共に、社会人をも受け入れる大学院・修士課程（2年）の平成15年4月開設を目指して準備を進め、本年6月に文部科学省に大学院設置認可申請書を提出し、文部科学省・大学院設置審議会の審査を受けました。この過程で、開設に向けて障害になる問題の指摘はありませんでした。現在は、本年12月末に認可の判定が出るのを待っている状況にあります。

2. 大学院（健康科学研究科）の目標

今日、保健・医療・福祉分野は、医療保険制度の改革や介護保険制度の導入などにより、大きな変革の時期にきています。こうした中で、より高度な専門性とこれら分野の専門職者間の相互連携、統合が極めて重要になっています。このような時代の要請に応えて、保健・医療・福祉サービスを包括的に提供できる幅広い学識と豊かな人間性に裏打ちされた実践的専門能力を備えた高度専門職業人の育成を目指します。

3. 健康科学研究科の構成分野と領域の概要

本学の大学院の構成は、図に示されているように、保健・医療・福祉に関わる広い理解と相互の連携を目指して、関連する4分野からなる１専攻の「健康科学研究科」とします。定員は社会人も含めて20名。

① 地域保健福祉学分野 は、老人や障害者等が地域で自立して生活することを支援するうえで必要な保健・医療・福祉に関する専門知識を総合的に学ぶ構成にしています。

② 看護学分野 は、看護教育・管理領域、成人・老人・慢性疾患に関わる生活支援看護領域に加えて、CNSコースとしての母子看護学領域と救急・重症看護に関わるクリティカルケア看護領域などから構成されています。

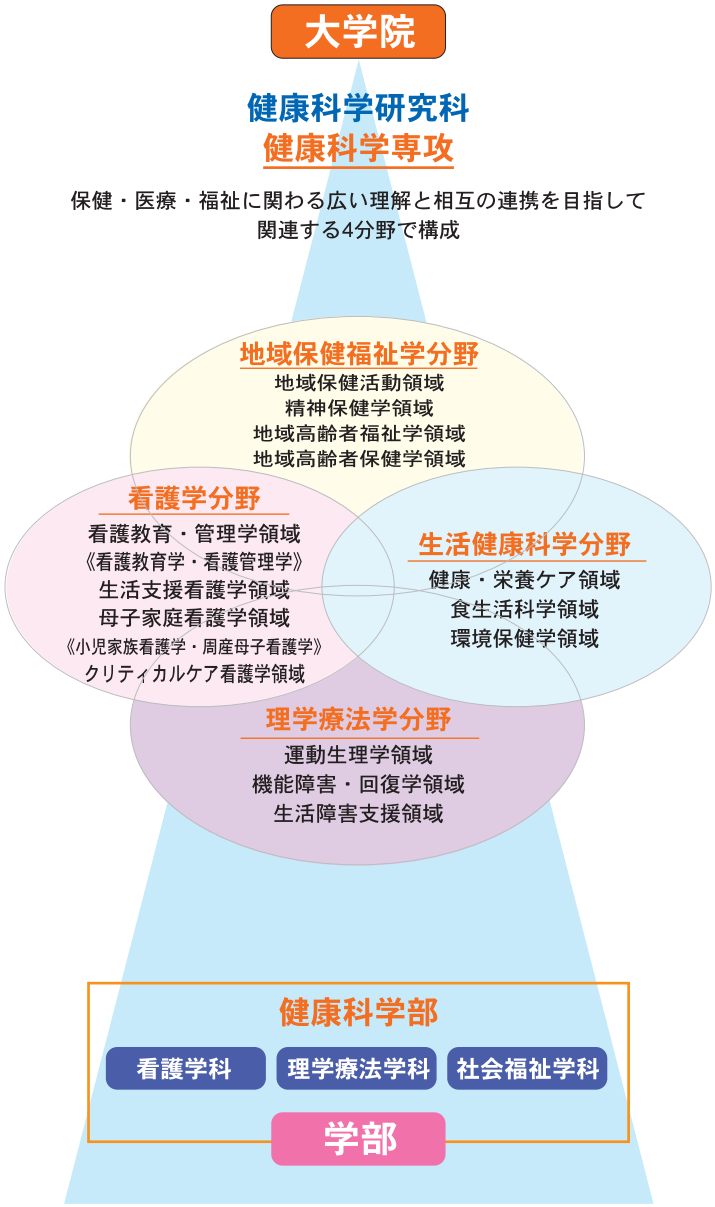
③ 理学療法学分野 は、運動生理学領域、老人・障害者の機能回復や生活支援に必要なリハビリテーション技術の修得等に関する領域から構成されています。

④ 生活健康科学分野 は、学部にはない分野ですが、国民、県民の健康の保持・増進に最も重要な１次予防としての食、栄養、環境に関する領域から構成されています。

4. 社会人の受け入れを積極的に考えています

短大や専修学校の卒業生にも進学の機会を開くと共に、社会人が働きながら学べるように、昼と夜、土曜日や夏季、冬季にも講義を行い、リカレント教育の場を提供します。

本学では大学院への入学を希望される方が多いことを期待しています。どのようなことでもかまいませんので、気軽にお問い合わせ下さい（電話 017－765－2000）。また、受験要項は設置の認可が降り次第、すぐにお渡しできますので、周囲の方にも周知いただけますようお願いいたします。



自著紹介
「地域理学療法 第2版」

理学療法学科教授：伊藤　日出男

地域理学療法という分野は、理学療法教育の中でテキストとして使用できるものは少ないため、1992年に監修者の奈良勲・広島大学医学部保健学科教授に勧められるままに、本書を理学療法シリーズの中に加えていただいたものです。一人では荷が重過ぎるので、畏友の岡山県立大学・香川幸次郎教授に総論部分を担当していただき、私が各論部分を担当してやっと完成したものでした。

私は約30年間に及ぶ在宅高齢障害者の人々との係わりと、前任地の弘前大学医療技術短期大学部での教育経験を通して自分なりに体系化し、写真を多くして若い理学療法士や学生に興味を持って貰えるようにしました。それから10年を経過して、社会情勢が大きく変化しデータの殆どは古くなったので、出版社のご好意によって今回改訂版を発行することが出来ました。第２版の特色としては、初版では触れなかった障害予防の重要性を強調したこと、青森県立保健大学の教育実践を紹介したことです。学生をはじめ多くの方々に目を通して頂き、厳しい批判などを頂きたいと念じております。

書　名：PTマニュアル「地域理学療法」第２版
著　者：伊藤日出男、香川幸次郎
発行所：医歯薬出版　発行日：２００２年７月１日
価　格：　３６００円

自著紹介
「これで分かるディーゼル排ガス汚染」

人間総合科学科目教授：嵯峨井　勝

本書は、沿道大気汚染物質の中のディーゼル排気微粒子（DEP、黒いスス）が気管支喘息を引き起こすことを実証した研究紹介とその研究過程での苦労話や今後のエネルギー動向等について書いたものです。この研究を進めるに当って、１億円の実験装置を作りましたが、なかなか上手く動かず責任感に押しつぶされノイローゼになったこと、公害裁判の弁護団に頼まれ、私達の研究成果を法廷で証言したこと、国が雇った御用学者との裁判上での論争などについて書きました。

東京都知事は、私達の研究結果を丸ごと評価してくれ、それを根拠にディーゼルNO作戦を展開しましたが、私が以前勤めていた環境庁や国は全く認めていません。大気汚染で気管支喘息になり、そのため職を失ったりして苦労している気管支喘息の患者さんが、各地で道路公団や国等を訴えて裁判を起していますが、2000年の尼崎と名古屋南部、今年10月の東京の大気汚染裁判では、私が主張したDEP原因説が採用され、国と道路公団、等は健康被害の賠償を命じられました。

書　名：これで分かるディーゼル排ガス汚染
著　者：嵯峨井　勝　発行所：合同出版
発行日：２００２年６月

私が薦める本「天国の本屋」

看護学科４年　小丹枝　賢

最近、出版業界でちょっとした話題になっている本があります。それがこれからご紹介させて頂くこの「天国の本屋」という本です。この本は「かまくら春秋社」という出版社から出ているのですが、とある一軒の本屋の店主がこの本にベタ惚れしたことからムーブメントが起こります。その本屋でベストセラーに交えて平積みにしたり、その本屋の店主が他の出版社の営業マンに薦めてみたりと普通では考えられない事です。しかもその薦められた営業マンもこの本に惚れ込んでしまい、他の出版社の本であるにも関わらず営業先でこの本を置くように薦めたりと、その動きはどんどんと広まっていきました。

前置きが長くなってしまったのですが、どういう本であるのか簡単に説明したいと思います。青春をテーマ（？）にして書かれた本でサイズは小冊子くらいの大きさで厚さもそんなになく（19㎜、119ページ）、淡いタッチで描かれた絵が頻繁に挿入されているので絵本まではいきませんが、さりとて文庫本のボリュームがあるわけでもなく、1時間程でサラッと読めてしまえる分量だと思います。

お薦め本ではありますが、敢えてここでは本の内容等は書かないことにします。これはここの主旨に反しているかもしれませんが、実際に本を読んで頂く事が一番良いと思ったからです。折角の秀逸な本を私の主観で汚してしまうのはもったいないからです。あくまでも「こういう素晴らしい本がある」ということを一人でも多くの人に知ってもらいたかったのです。ありきたりな表現ではありますが、久し振りに本を読んで「感動」しました。本の虫である私が自信を持って推薦する本です。是非読んでみて下さい。

なお反響の大きさからシリーズ化され、現在第２作目である「うつくしいろのゆめ」（木楽舎）と今秋発売されたばかりの第３作目「恋火」（小学館）が出ています。

第8回日本看護診断学会を開催して

日本看護診断学会
第8回学術大会長 新道　幸恵

第８回日本看護診断学会学術大会を「看護診断と情報科学－ケアとテクノロジーの出会い」をメインテーマとして2002年７月19日20日の２日間、青森市文化会館において、約1200人の参加者を得て、盛況の内に修了することができました。本学術大会の開催に当たっては、本学看護学科の教員８人を中心とし、日本看護診断学会の理事や評議員のメンバーを３人加えて、２年前から企画委員会を発足させ、準備に当たってきました。さらに、開催数ヶ月前には、本学の看護学科の教員・学生の方々を始め、県内の病院及び大学の看護の関係者の方々による実行委員会を発足させて、開催当日の２日間の運営のための準備を重ねてきました。また、資金面においては、参加費及び看護関係出版社等からのご寄付によってかろうじて赤字を出さずにすみました。それには、なによりも県外からの参加者の内の宿泊者が延べ1000人を超えたことによって、青森県コンベンションセンターからそれ相応のご寄付を頂けたことが寄与しています。本学術大会の成功は、学内外の看護職の方々のご協力ご支援のおかげと感謝しています。

日本看護診断学会について簡単に紹介しますと、1990年に発足した看護診断研究会を前身として、1995年に発足しました。また、1999年には日本学術会議に登録されました。研究会は1973年に設立された北米看護診断協会（ＮＡＮＤＡ）で開発された看護診断及びその理念を我が国に導入し、看護の臨床現場で正確に使用されることを目標にして研修会を中心にした活動が行われていました。それを引き継いだ本学会は、「適切な看護を行うために看護診断に関する研究・開発・検証・普及並びに会員相互の交流を推進し、同時に看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって、看護の進歩向上に貢献することを目的とする」ことを会則の第２条に掲げて活動しています。

我が国における近年の保健医療制度の変革の波は、保健医療の第一線で働く看護職にも大きく影響しております。第８回の学術大会では、保健医療の変革に看護職者が対応しながら、高度な判断力をもって、看護実践ができることを支援するプログラムの作成を心がけました。その効果は、参加者の多くから、ワークショップ、事例検討などの参加型のプログラムに好評を得たことに示されていると思われます。

参加者の多くの方々から、学会運営のすばらしさや関係者のマナーの良さについてお褒めの言葉頂きました。それは、本学開学２年目から看護学科教授主催による全国規模の学会が今回を含めて、計４つ開催され、多くの教員がその企画運営に参画して、経験を重ねてきた成果といえましょう。改めて、本学関係者に御礼を申し上げます。

第17回日本看護歴史学会のご紹介

日本看護歴史学会
第17回学術大会長 島崎　玲子

2003年9月5日㈮・6日㈯に、この緑の街、青森で第17回日本看護歴史学会を開催することになりましたのでご紹介させていただきます。

この大会では、「看取りの文化　古代から現在へ」と題しまして、日本の看護の原点とその変遷を追求したいと存じます。日本の看護は自己看護、家庭看護で始まりその間に宗教とか魔術の影響はありましたが、第二次世界大戦終了後までは、主に家族によって看護が行われていました。戦後、伝染病患者が多発し、占領軍は陸軍病院や海軍病院を国立病院に移行し、これらの病院に患者を収容し、患者中心の看護という理念を普及させました。以後、病院看護が発達しましたが、医療費の高騰、疾病構造の変化により再び「介護または家庭看護」の重要性が認識されて参りました。この大会では占領軍公衆衛生福祉局長サムス准将（写真参照）や米国人看護婦の指導のもとに日本の医療サービスの改革がどのように行われ、現在へどのように影響を及ぼしたか等に焦点を置いて発表や写真展を開きます。

特別講演Ⅰでは「看取りの文化　古代から現在へ」と題して新村拓先生のご講演をいただきます。先生は「死と病と看護の社会史」「ホスピスと老人介護の歴史」を執筆しております。講演Ⅱでは青森県における悲惨な出来事「八甲田雪中行軍事件：特に第５連隊と第31連隊による捜索活動」を弘前大学麻酔科松木明知教授にお願いしております。先生はこの八甲田事件について多くの新しい史料を発掘して研究を続けていらっしゃいます。

この他に「日本の看護の法律」、「青森県における保健婦の派遣制」「青森県における病院の看護サービスの変遷」「男性の看護への参画の歴史」などについても発表の予定ですので是非ご参加下さい。

公衆衛生福祉局局長サムス准将

第二次世界大戦後、モデルスクールに香淳皇后陛下御訪問

第2回国際健康コミュニケーション科学学会に参画して

人間総合科学科目講師 浅田　豊

さわやかな秋風が心地よい去る9月21日㈯から22日㈰にかけて、札幌市の中心街、目抜き通りに位置する北海道医療大学サテライトキャンパスにおいて、国際健康コミュニケーション科学学会第２回年次大会が、盛大に開催されました。

昨年度、本学で実施された第1回記念大会に引き続き、大変質の高い、学術研究上の意義がまことに深い大会でありました。国際学会の名のとおり、参加者は日本全国からはもとより、諸外国からも参集され、質疑応答や、演者とフロアーが一体となったディスカッションは英語を中心に複数の言語が常に飛び交い、２日間を通じて常に活発で熱心な議論が展開されました。

今大会の特色、あるいは成果をいくつかの視点からまとめるならば、まず最初に「プログラムの充実」が挙げられます。「健康科学：過去、現在、未来」の大会テーマのもとに、「基調講演」２題（川島彪秀会長、赤坂和雄副会長）、「特別講演」２題（広重力北海道医療大学学長、吉岡利忠副会長）、健康コミュニケーション科学の諸問題を研究面・教育面・臨床の各側面から考える「パネル・ディスカッション」、聴くということを様々な角度から科学的に考える「シンポジウム」といった充実した演題がそろいました。これらを骨格としつつ、研究発表も昨年と同様に、またそれ以上に多彩であり、実践報告・体験型研修的な内容のものを含み実に多様で、学会の力量あるいは幅の広さを示していました。

この中でもとりわけ、川島会長によるキーノート・アドレスは大変示唆に富むものでありました。川島会長は保健医療福祉に関するコミュニケーション、対人コミュニケーション、異文化間コミュニケーション、スピーチ・コミュニケーション、コミュニケーション・セラピー等、健康コミュニケーション科学の多面的な研究領域と学術・臨床活動を理論的に総括・類型化され、今日のグローバル社会の中でコミュニケーション研究を進めていく際には、隣接する分野についても関心を持ちながら総合的観点からも研究を展開する必要性がある、という主旨についても述べられました。有益な指針を我々参加者に多く与えてくださいました。また、今大会は「学会としての今後の拡大・発展の基盤形成」という視点からも評価できます。つまり、理論面、あるいは実証面、臨床活動面からの研究発表がそろい、本学会として今後さらに追究していくべき課題が明確になったことは、大きな収穫でした。大会初日夜の懇親会等を通じて、会員間の交流やあたたかい親睦が深まったこともまた、意味のある成果として挙げられます。筆者は学会役員の立場で、次年度大会（会場：東京経済大学）の運営への見通しや、学会メンバーの国内外における拡充、研究・研修会やワークショップなどさらなる学会活動の充実などを視野に入れつつ、今大会に参画しましたので、今大会の成功を率直にうれしく感じました。

平成15年度編入学生募集

青森県立保健大学では平成15年4月から編入学制度を実施することになりました。編入学生の受け入れ方針としては、現在の少子高齢化社会の多様なニーズに応えられるように、保健医療福祉の現職者に再教育の機会を提供し、また新しく四年制大学に進路を求めている学習意欲のある短期大学や高等専門学校及び専修学校卒業者に進学の機会を提供することにあります。

出願資格や入学後の学習内容など、詳しいことは下記に問い合わせ下さい。多くの方々の出願を期待しております（募集要項は11月下旬から配布中）。

●募集定員は次の通りです。

看護学科	３年次編入	１０名
理学療法学科	３年次編入	２名
社会福祉学科	２年次編入	４名

●試験日程：

出願期間	平成15年１月６日（月）～１月15日（水）
試験日	平成15年２月８日（土）
試験会場	青森県立保健大学
合格発表	平成15年2月21日（金）

●問い合わせ先：

青森県立保健大学教務学生課

TEL 017-765-2144　FAX 017-765-2188　e-mail nyushi@auhw.ac.jp　http://www.auhw.ac.jp

＜新任紹介＞

看護学科 教授

Yoshiko S. Leibowitz（ヨシコ シムラ リボウィッツ）

アメリカの建国地フィラデルフィアからやって来ました。日中でも姿を変えてゆく山、空、雲に囲まれ自然と対話しながらじっくりと仕事ができそうです。基本に戻り学べる環境に出会い、これからが楽しみです。雪国でしか味わえないことを何でも経験したいです。どうぞ宜しく。

人間総合科学科目 助教授

佐藤　伸（サトウ　シン）

津軽海峡の対岸の街、函館から来ました。今はすばらしい環境の中で研究や教育に没頭できそうなのでわくわくしています。そして、微力ながらも皆さんのお役に立てればと思っています。宜しくお願いします。

図書館 司書

山田　奈々（ヤマダ　ナナ）

「○○○は生長する有機体である」（ランガナタン）……有機体が専門の皆さんなら、○を埋める言葉が多数思い当たるかもしれませんね。答えは、事務室の前を通り過ぎて突き当たりに口を開けている、アレです。

図書館 嘱託員

日高　亨子（ヒダカ　トシコ）

青森県の文学には、人よりほんの少しだけ詳しく、宮本輝が好きで、谷川俊太郎が好きで、推理小説を読み漁る…。そんな私がこの度「保健大学」図書館でお世話になることになりました。宜しくお願いします。

＜退職＞

Pamela Minarik（看護学科教授）　Noel Fukushima（人間総合科学科目教授）　**北條　伸一**（図書館）

編集後記

《活彩！保健大学だより》第7号をお届けいたします。今年は長い夏からあっという間に秋が過ぎて、急に冬の季節がやってきました。4年生は卒業研究をしながら、就職活動と国家試験対策をしているという状況で、これまでに経験したことのない期待と不安に満ちた生活をしているものと思います。大学としても、就職率、国家試験合格率を気にしながら、初めての卒業生を送る準備、平成15年4月からの編入学生の募集、平成15年4月開設予定で設置認可申請中の大学院の準備など、関係者は学生と同じく期待と不安の日々を過ごしているものと思います。

本号では、ニュース欄でC棟（大学院棟）の紹介、大学院設置準備委員会委員長の大学院の紹介、就職対策専門部会長の就職活動進捗状況報告など新しい記事を掲載しました。第2号から連載されてきた「教室（領域・分野・職域等）紹介欄」はすべての領域等を一巡したことから一休みし、出版物紹介欄と学会等印象記欄を新たに設けました。教室等紹介欄は新しい分野ができた時点で再開したいと思います。

お忙しい中、原稿を担当していただいた方々には深謝いたします。

（広報委員長／竹森幸一）

広報委員会委員

竹森幸一、赤坂和雄、勘林秀行、鈴木保巳、藤田あけみ、伊藤貞一

記録専門部会

秋庭由佳、李相潤、田中志子、井澤弘美

事務担当

大谷順一（対外広報担当）、上村隆之（入試広報担当）、根市茂美路（学内広報誌、広報委員会事務担当）

編集・発行／青森県立保健大学広報委員会（〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2007）

バックナンバーはＵＲＬをご覧下さい。　ＵＲＬ/http://www. auhw. ac. jp/